



かみがみている かみがみている

教祖五十年のひながたは、たすけ、一条の道を歩まれながらも、人々の嫉妬、猜疑、無理解からくる弁難攻撃、あるいはまた白刃を抜いての乱暴狼藉など、煩わしい生活に明け暮れされました。

ところが教祖は、益々心勇み、陽気なかぐらづとめを教え、てをどりの手をつけられました。そこには苦難の陰影はなく、また白刃の下をくぐられた厳しい日々の片影さえも窺えませんが、ただ一れつの子に、親神様の胸のうちを知らせよう、との親心あるばかりです。

ひとがなにごといはうとも

かみがみているきをしずめ(四下り目一ツ)

私たちはお道を通る上でも、また社会生活を営む上でも、他人はいろんなことを言います。頼りにする人からの思いがけない誤解や、正論を装った非難などには、心がくじけそうになることもあるでしょう。

教祖はたすけの根本であるおつとめをお教え下さいましたが、当時の法に触れることから、厳寒酷暑を問わず、十数度に余る獄舎への御苦労が続きました。

そのことを思案し、私たちは教祖百四十年祭に向かって残りの時間、親神様、教祖にお喜び頂ける道を、ひながたに沿って勇んで歩ませて頂きましょう。

本島大教会布教部(為)

